

# 我らの海は我らの手で

～戻ってきたチヌたち～

白石島漁協青壮年部

原田 房行

## 1. 地域の概況

私たちの住んでいる白石島は、岡山県の西南部、笠岡港から南へ約12kmに位置し、広島県との県境に面した、笠岡諸島の島の一つである。(図1)

東は水島灘、西は燧灘に位置した離島であり、古くから好漁場に恵まれ、漁船漁業の盛んな所である。

また、国無形文化財「白石踊」と、きれいな海水浴場がある島として有名である。

## 2. 漁業の概要

白石島漁協は正組合員70名、准組合員36名の計106名で構成され、小型底曳き網、小型定置網、建網、一本釣り等の漁船漁業とノリ養殖業を営んでおり、平成7年度の総生産額は約1億7千万円、うち漁船漁業によるものが約1億2千万円(71%)、ノリ養殖業によるものが約5千万円(29%)となっている。

## 3. 研究グループの組織及び運営

私たちの所属している白石島漁協青壮年部は、45歳未満の正組合員で構成され、昭和60年に16人で設立し、現在の部員数は、9人で平均年齢が38歳である。

白石島漁協青壮年部の主な活動(表1)は、白石島で行っている海洋牧場事業の取り組みと一般住民を含めた島内外へのPR、島の児童を対象とした島の漁業の紹介と体験漁業各種学習会等への参加・交流会の開催(他地区漁業者、都市部等)、定期的な漁場クリーンアップ作戦の実施(写1)と地区PTAと共同で行う海浜清掃などである。

## 4. 研究・実践活動課題選定の動機

私達が漁をしている白石島周辺の海域は県下でも有数の好漁場であり、以前は「ヨコソワとカジカケ(いずれも天然礁)さえあれば島で一生楽に暮らしていける。」と言われていた。しかし、現在は、高度経済成長期を経て、瀬戸内海全域に及ぶ漁場環境の悪化、また、漁船・漁具の大型化、機械化による漁獲圧の増大等により、昔のような豊かさがなくなった。これまでも、組合員が一致団結し、県内でいち早く放流事業に着手し、クルマエビ、ガザミ、チヌ等の放流を行ってきた(表2)。徐々に効果は上がってきたが、考えていたほどの成果ではなかった。「現状のままでは、漁業で飯は食えんし、幼稚魚も育たん。これまでと同じやり方ではダメだ。わし等の海はもっと魚が住めるはず」と皆が口を揃えて言い始めた。稚魚を放流するだけでなく、この稚魚を守り育てることが重要であるとの考えから、「自分たちの海は自分たちで守ろう」と漁協の自主規制で島の北側を幼稚魚保護区域に設定した。さらに、魚が大きく元気に育つ環境を作ろうと、漁場環境の整備を積極的に県や市に働きかけた。このような一致団結した漁業者の意気込みが音響馴致という

新しい放流技術を取り入れた海洋牧場事業を導入するきっかけとなった。

## 5. 研究・実践活動状況及び効果

私達は、海洋牧場施設の維持・管理や稚魚の中間育成・放流を行っている。放流用のチヌを音に慣れさせるための約1カ月間の中間育成にあたっては、少しでも多くの魚が放流できるように細心の注意を払っている。港の中に1カ所、港の外に2カ所ある音響馴致施設の点検、餌の確認を交代制で行い、“給餌機の餌はきちんと出ているか” “餌はなくなっていないか”と皆が漁の合間に様子を見ては連絡を取り合っている（写2）。中間育成用の筏の網換えは、汚れが付きやすい時期には、ほぼ1週間から10日毎に行い、作業日を組合の前の掲示板に張り出しておくのと、毎回、青壮年部員だけでなく、先輩の漁業者もかけつけてくれる（写3）。最初のうちは、網換えの時、網を破って魚を逃がしたり、魚の扱いが悪くて魚を弱らせしまったりと失敗をしたが、今では多くの経験を積み、少しでも魚の様子がおかしいときには、水産試験場等と相談し、的確に対処できるようになった。

私達が大切に育て上げたチヌは、音響馴致が終わると放流するが、その時には放流後の調査のため、魚に標識を付けたたり、鱸カットをする（写4）。県の人に標識の付け方や鱸カットの仕方を教わり、これらの作業に加わった。今後の調査のためと思いつつも魚に傷をつけるのは少し心が痛んだ。

県では海洋牧場に関する調査を月に1回程度行うが、こういった調査にも参加している。調査の時には、漁に出た組合員が入れ替わり立ち替わりやってきて、漁獲状況や海洋牧場の調査状況などの情報交換を行う。

また、沿岸漁場整備開発事業で行われることになった魚の棲み場所づくりにも積極的に参画した。県が行った調査結果を基に、潮の流れはどうか、どんな魚がどこに棲んでいるか、成長に応じてどういうふうに移動するかなど話し合い、私達の漁を通じて得た知識を生かして、一緒に魚礁の配置等の計画を立てた。

私達は海洋牧場を島の人や観光客へ知ってもらうためのPRを行っている。定期船の切符売り場の方の協力を得て、観光客がチヌに餌をまいて観察してもらえるように切符売り場にパンフレットを掲示して、餌の無人販売を行っている（図2）。

初めは、餌まきをする人は少なかった。しかし、餌をまくと、餌付けされたチヌがたくさん集まってくるのが観光客の噂となり、餌まきをする人が段々多くなった（写5）。時には、「これ、何という魚」「これは、チヌと言う魚だよ」「なんか、池のコイみたい」と言った会話が聞かれる。餌まきは、無人販売で紙コップ一杯が100円で行うことができ、年間に1000杯程度まかれている。この観光客の餌まきは、一般の人々にも稚魚を大切にすることを分かってもらい、また、少しでも餌代の助けにもなればとの青壮年部員の発案であり、大変好評である。

平成3年に始まった海洋牧場事業は、1年余りで順調に進み始め徐々に活気づいてきたが、問題も出てきた。近年の釣り人気やレジャーボートの増加、さらにはこの事業がテレビ等にも盛んに取り上げられるようになったこともあってか、海洋牧場内での遊漁者が増加した。漁協の自主規制により禁漁区にした場所にも心ない遊漁者が増え始めた。そこで、県の方に強く要望し、平成4年9月付けで海区漁業調整委員会指示により、漁港内及び島の北側地先が禁漁区に指定された（図3）。それを、周知するため漁港の数カ所に禁漁区を図示した手作りの看板を設置した。それでも、周知不足のためか、遊漁船などが夜間に

入って釣りをするため、平成5年度からは、全組合員が交替で、遊漁船などが多く見られる9月末から12月末の木曜日から土曜日の夜に夜間警備を実施した。夜間警備には、島の駐在さんの協力もあり、大変助かった。さらに、島の人々も釣り客に注意し、協力してくれた。

このように海洋牧場に対する意識が島の人々の間にも高まり、海洋牧場に関する県や市との打ち合わせにも漁業者以外の人も多数参加してくれるほどになった。

## 6.波及効果

海洋牧場の実施により、ついに、島にチヌたちが戻ってきた。今では漁港内一帯に春から秋にかけて1～2歳魚のチヌが群れているし、港の外の音響ブイの周りには、海上からでも2～3歳の群が多数見られるようになった(写6)。島の周りでは3～5歳魚がよく釣り上げられる。白石島漁協では、建網、小型定置網等での漁獲量も確実に増加して、平成3年(1991年)に7.6トンであったのが平成6年(1994年)には14.0トンと1.8倍以上になった(図4)。また、笠岡市全体でも徐々に漁獲量が増加している(図5)。特に定置網では平成3年(1991年)の124トンから平成7年(1995年)の215トンと約1.7倍に増加した(図6)。それに伴い、周辺の漁協でも海洋牧場に対する意識が高まってきた。小高島と白石島に挟まれた海域については、底曳き網漁業禁止区域(図3)とするように漁業者間で取り決めを行った。そして、漁場や資源の管理を徹底させるため、笠岡市6漁協の関係漁業者が中心となって笠岡地区海洋牧場管理運営協議会を平成6年に発足させた。

それ以上に効果があったのは、我々の様々な活動等により、資源管理の必要性や大切さが島の人々に受け入れられるようになり、「海洋牧場で、すごいね」「島にチヌが戻ってきたね。」と言う声が島の内外で聞かれるようになった。

今も我々の活動に島の人達が積極的に参加、応援してくれている。

## 7.今後の課題

海洋牧場海域は私達の地先漁場であるだけでなく、岡山県西部海域における漁業資源の供給場所でもある。したがって、漁場の利用は周辺の漁協と共に話し合いながら決めていかなければならない。また、これらの資源は漁業者のためだけのものではない。遊漁者にも資源利用の権利があると考えべき時期が来ているのではないか。しかし、海を生活の場とし、海と共に生きている私達には海を守っていく義務がある。遊漁者をやみくもに排除しようとするのではなく、私達がちゃんと管理をして、秩序あるかたちで利用してもらえれば観光漁業としての新たな道も開かれることとなる。将来、海洋牧場は海洋牧場管理運営協議会を中心に企業化を目指しているが、このような漁業と遊漁との共存がこれからの漁業のキーワードになるものと思う。さらに、白石島では海洋牧場を推進し、漁協及び島のさらなる活性化に結びつけたいと思う。

我々は、白石島が、人と魚が共存し、“チヌの島”、“海洋牧場の島”と言われるよう、今後も積極的な活動を続けていきたい。

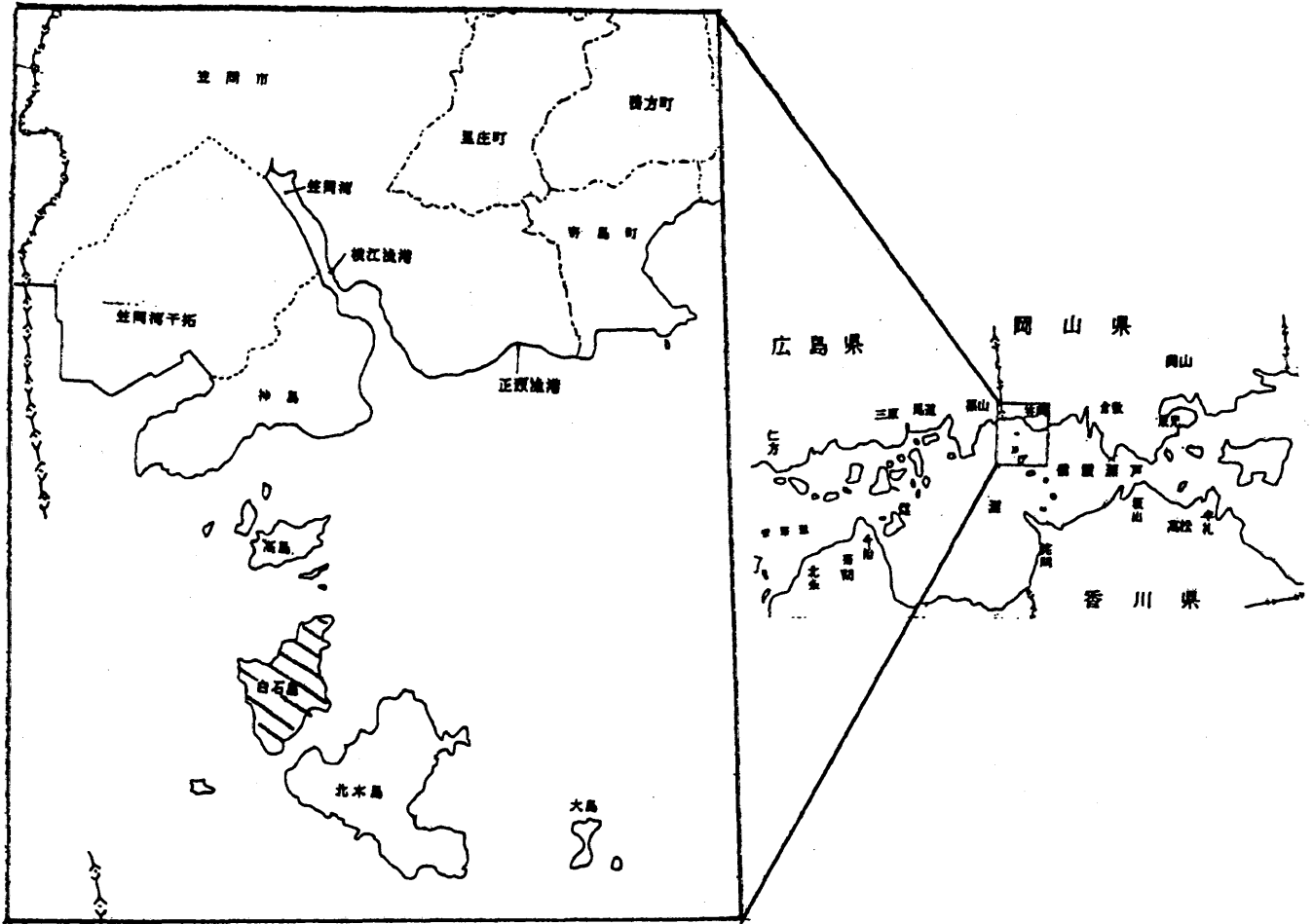


図1 地域の位置図

表-2 種苗放流実績

年度別	魚種別	クマエビ	クロダイ	ガサミ	その他
昭和52		200	-	-	
53		140	-	-	
54		130	-	-	
55		150	-	-	
56		174	-	-	
57		-	-	-	
58		450	10	-	
59		300	-	-	
60		250	-	85	
61		-	5	34	
62		220	-	38	ヒラメ
63		120	-	20	
平成1		60	-	54	
2		60	-	40	
3		65	63	40	マダイ
4		-	38	-	
5		-	60	-	
6		-	128	-	
7		-	60	-	キジハタ

単位 千尾

表1 青壮年部の主な活動内容

1. 白石島で行っている海洋牧場事業の取り組みと一般住民を含めた島内外へのPR
2. 児童を対象とした島の漁業の紹介と  
体験漁業
3. 各種学習会の参加・交流会の開催  
(他地区漁業者、都市部等)
4. 定期的な漁場クリーンアップ作戦の実施と地区PTA共同で行う海浜清掃

# 魚の餌付に 参加しませんか？

- ・白石島漁協では、作り育てる漁業の一環として、海洋牧場を実施しています。
  - ・昨年6月より、クロダイ(4匁)の音響馴致により、餌付を行っています。
  - ・昨年の月俵放流(4匁)が、港内で大きく育っています。  
(推定 放流時約5cm → 現在約15cm)
  - ・皆さんも、作り育てる漁業に参加して下さい。  
自分の手で、餌を与えて、クロダイ(4匁)の様子を観察し、楽しんで下さい。
- (参考) 餌付の付いたクロダイは、昨年の月俵放流の印です。
- 無人販売致し封のて、餌を取った人は、代金を箱に入れて下さい。(1袋 → ￥100円です)

白石島漁協  
青壮年部

図2 餌まきのパンフレット

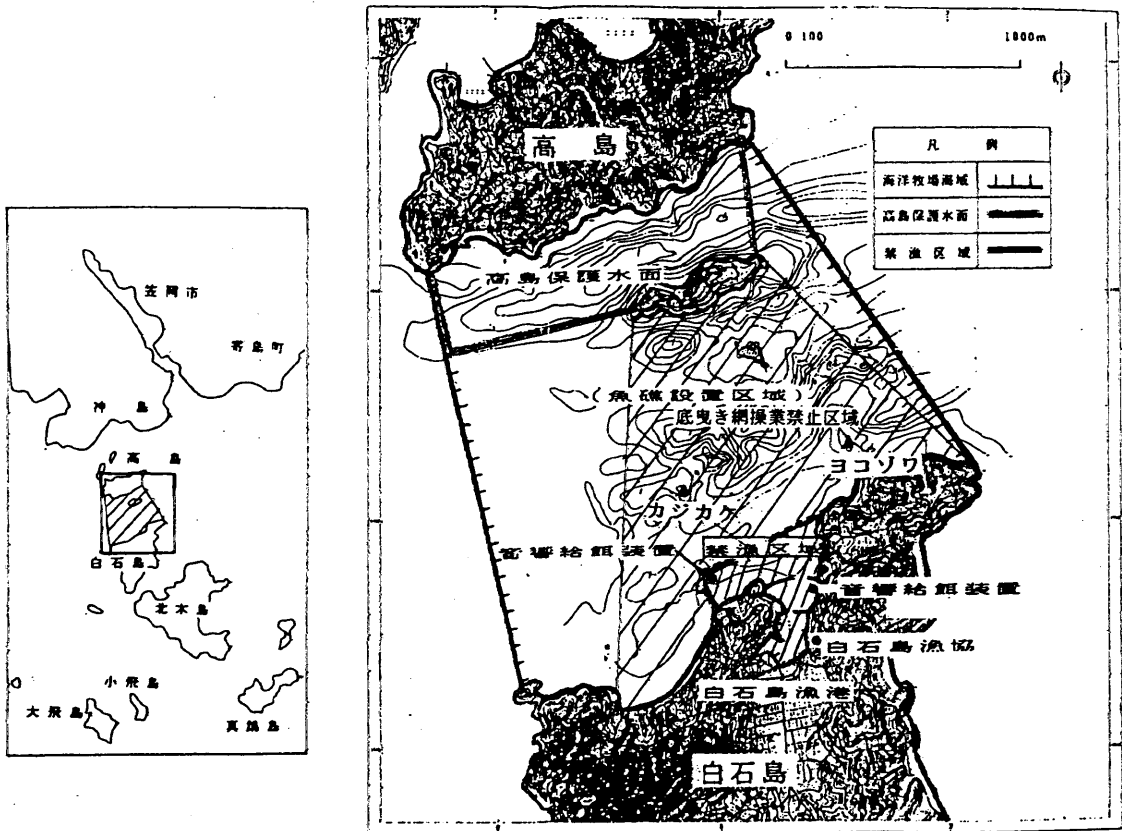


図3 海洋牧場位置図

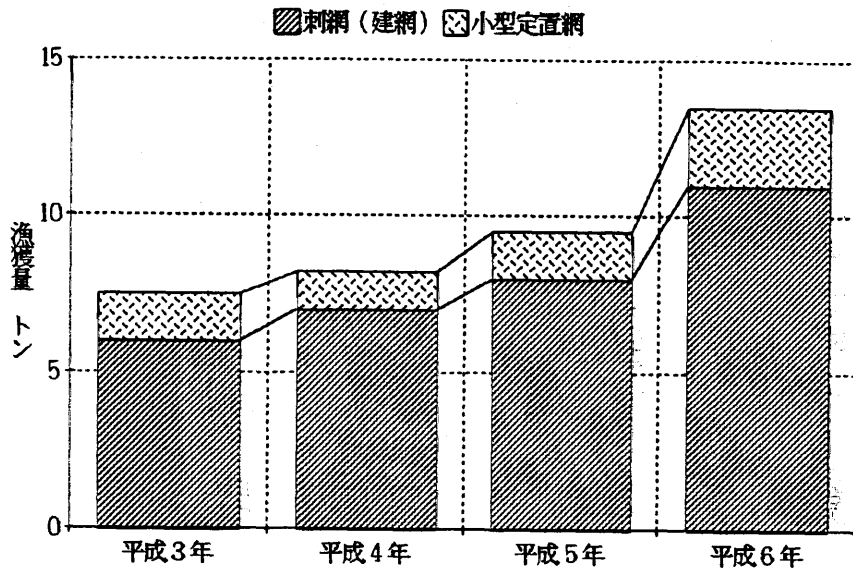


図4 白石島地先におけるクロダイ漁獲量の推移

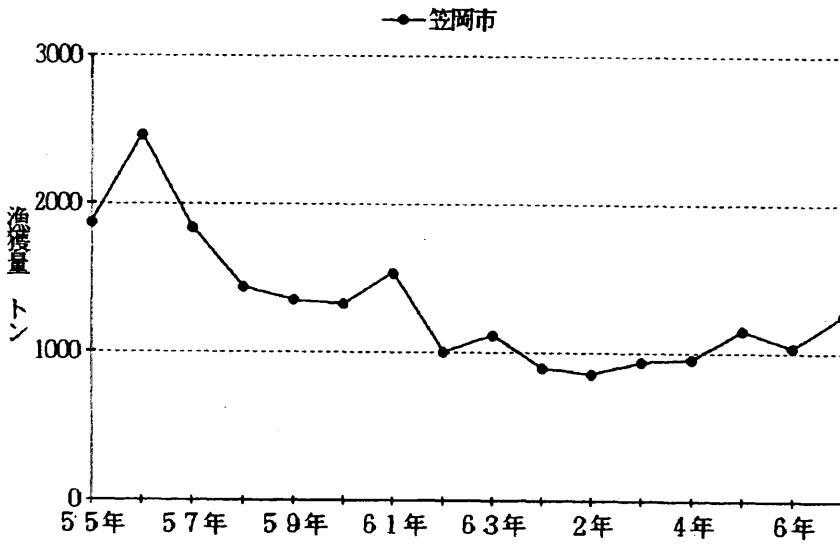


図5 笠岡市の漁獲量の推移

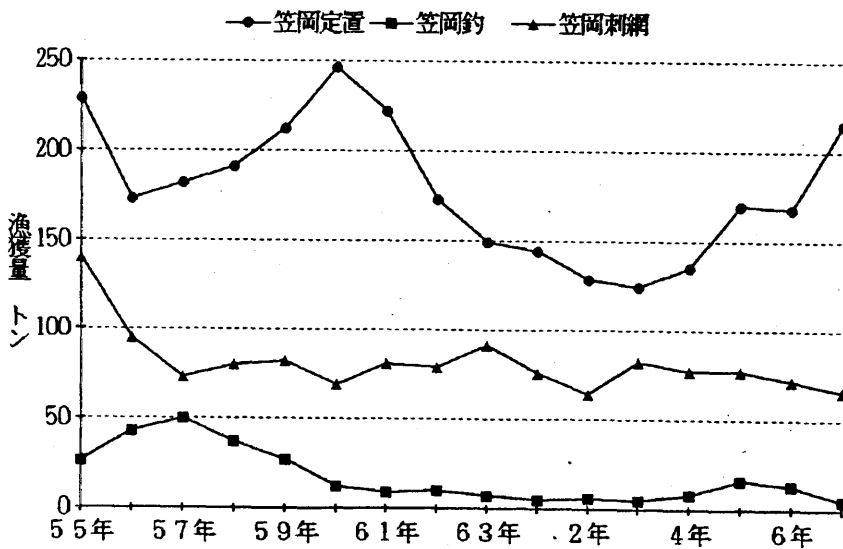
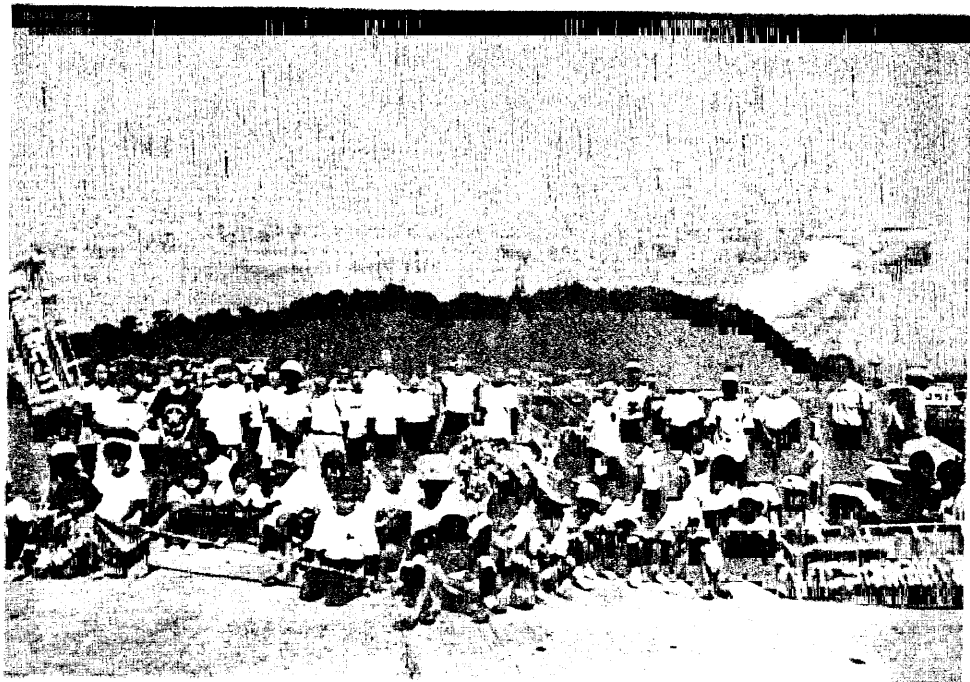
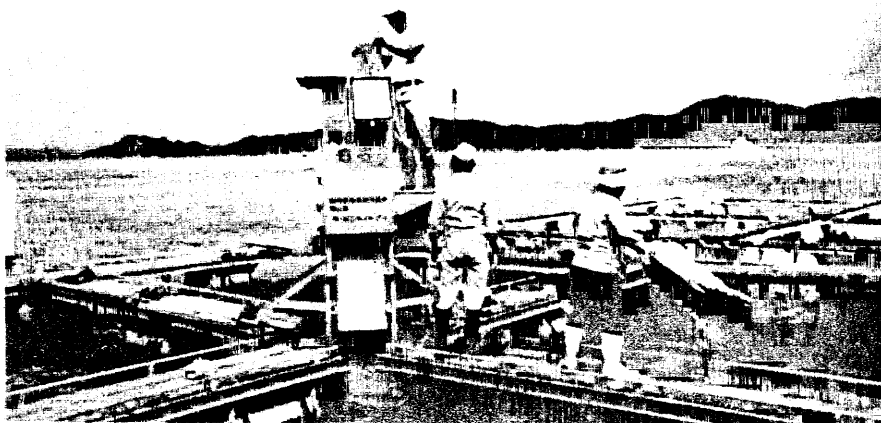


図6 笠岡市の漁獲量の推移 (漁業種別)



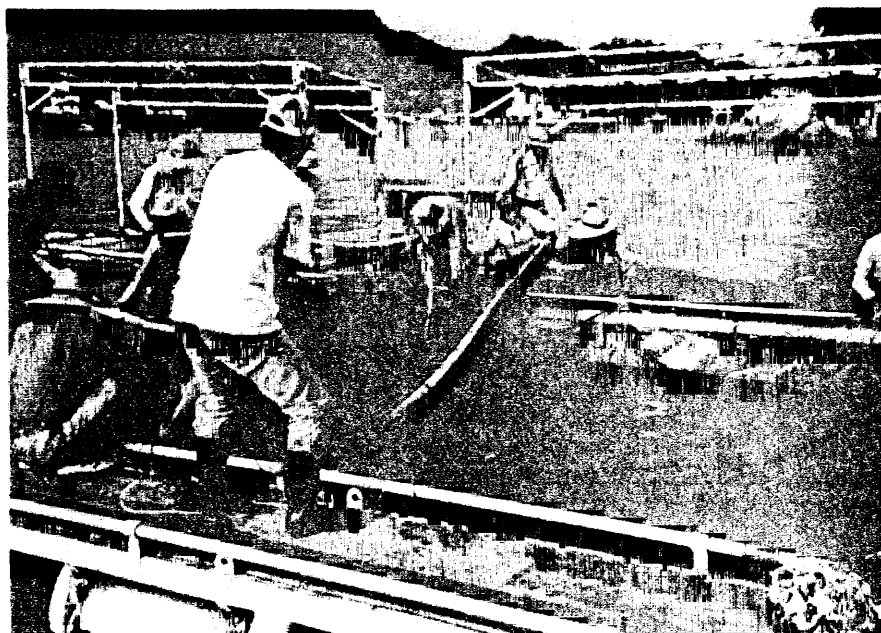
写 1

漁場クリーンアップ作戦



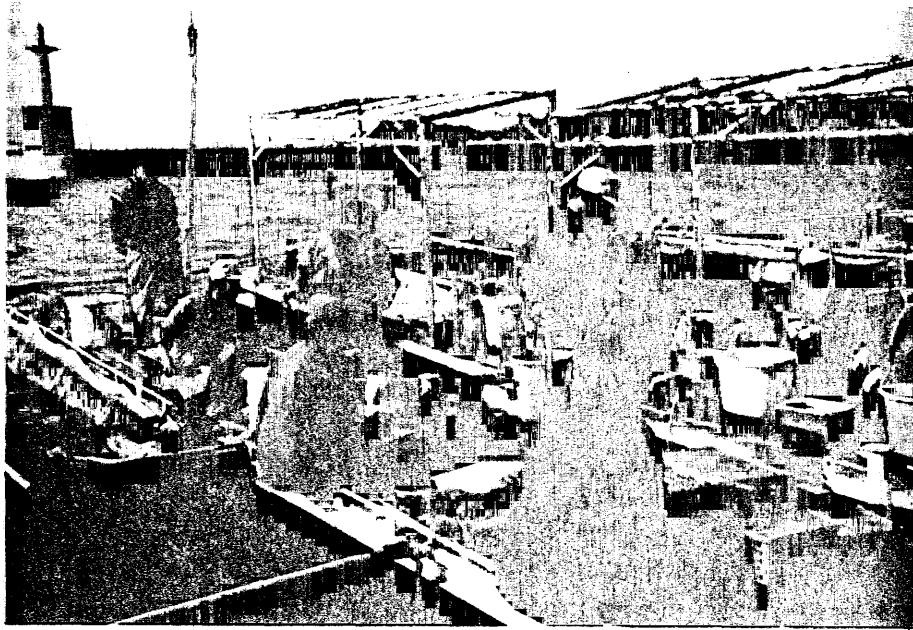
写 2

音響馴致施設の点検、  
餌の確認



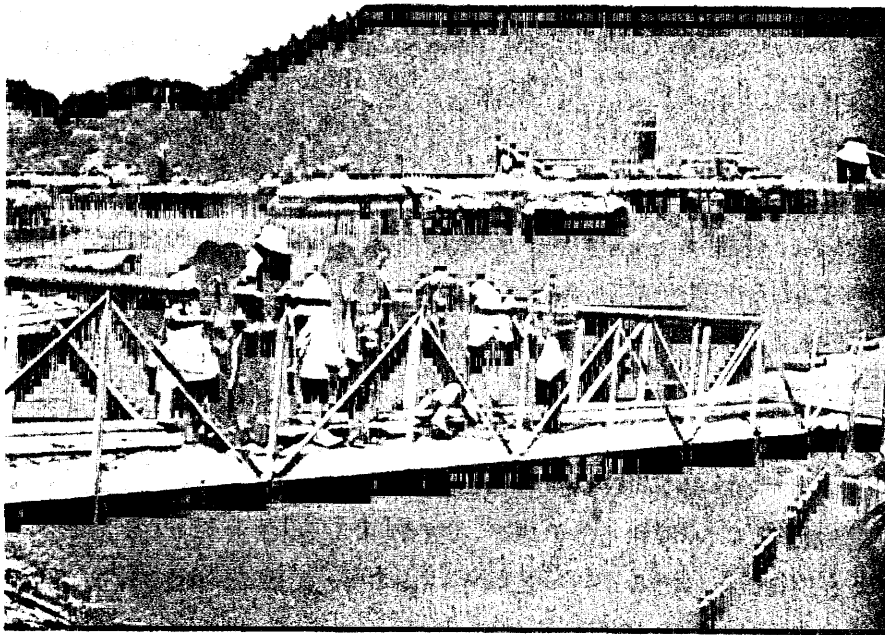
写 3

筏の網換え



写 4

放流魚の鰭カット作業



写 5

観光客の餌まき



写 6

チヌの群